

---

## 転院支援という仕事

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、小学館、2011、p.174-178)

2013年7月19日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

災害拠点病院の働きは急性期の傷病者の治療をし、家や福祉施設に帰って日常生活を送ってもらうことにあります。しかし、今回の震災は傷病者の帰る場所を奪ってしまいました。また、傷病者の人数が増えてしまい治療の質が低下してしまい、無理にでも退院を迫られる場合もあります。受け入れができない場合も多くあります。

アセスメントという仕事は患者の様子を見て転院先を判断する仕事です。看護係長の橋本千賀さんはその仕事をしています。震災直後は被害の少ない内陸の病院で直接出向き交渉をしましたが近隣の病院に転院できた患者は少数です。殆どは遠方の病院です。具体的な内容としては、治療を終えた患者に面接し、名前と自立度、どこの施設や病院、福祉避難所がいいか、県外の病院はいいのか等を聞きます。しかし、何も答えられない人や名前さえわからない人もいます。当然近隣に送ってあげたいですが、遠方に行かざるを得ない場合もあります。また、遠方へ行くのを嫌がる人もいます。それでもどうしようもなく説明し説得をします。その後、転院先を決定し転院先へどのように搬送するかの調整をします。調整は難しく、しかも迅速に行う必要があります。移動を行う際、天候や物資不足などで手間取ることがあります。患者に責められることもよくありますが労われると非常に充実感を感じます。

南三陸町立志津川病院では行動は迅速にし、幅広の医療用テープに名前、年齢、注意すべき点を書くことで効率の良い情報伝達を行えるようにしています。

今後を見据えるなら、支援のネットワーク間で、患者の情報をどう共有するか、今回の震災を踏まえて考える必要があると橋本さんは考えています。